

文章一

(須田 朗『もう少し知りたい人のための「ソフィーの世界」哲学ガイド』による。出題に際し省略をした部分がある。)

あらゆる変化の根底にはなにかある「元素」、つまりおおもとの素材がひそんでいる……。* おおもとの素材があつて自然界のすべての変化の陰で立ち回っているはずだ……。* すべてがそこから生まれ、また帰っていく「何か」がある……。* [S48]

(中略)

この「おおもとの素材探し」に決着をつけたのが、デモクリトスの原子論です。彼は自然のおおもとの素材は「原子」だといいます。原子はアトム(atom)の訳ですが、アトムはもともと、「これ以上分割できないもの」、「不可分なもの」という意味のことばです。物質をどんどん切り刻んでいって、もうこれ以上切り刻めないいちばん小さいもの、目に見えないくらい小さな粒子という意味です。このような原子が永遠不変なものなのです。この粒子は種類も数も無限にありますが、その原子の組み合わせによって、目に見える事物の変化が生じます。これを説明するのに、レゴ・ブロックを引き合いに出したのは、おみごとでした。レゴはたしかに原子論を説明するのには、「世界一、超天才的な」哲学的おもちゃです。今日でもデモクリトスの後継者たちが、「これ以上分割できないもの」探しを前に進めています。その結果、素粒子やさらにもっと小さい部分を発見しつつあるのです。

元素が一つか、四つか、無数かの違いはありますが、なにか永遠不滅なものが自然の変化の根底にあるにちがいないと考えた点で、ソクラテス以前の哲学者たちは一致しています。彼らがそう考えたのは、無からはなにも生まれないと信じていたからです。ところでこうした考え方のなかにすでに、存在についての二つの概念が認められます。一つは、存在するものは永遠不変なものだという考え。もう一つは、存在するものは変化し移ろいゆく一時的なものだ、という考えです。この二つのうち、前者を極端化するとパルメニデスの存在論が、後者を極端化するとヘラクレイトスの存在論が出てきます。

パルメニデスはいいます。「あるものはあるものであって、ないものはない」。これ、当たり前ですよ。でも、こういう言い方を徹底していくと、すごいことになります。つまり、「存在するものはあくまでも存在するのであって、なくなったりはしない。あるものがなくなったり、ないものが出てきたりするものが、変化である。だから、何も変化することはできない。一見、ものが変化しているようにみえるが、そんな感覚なんて、あてにならない」というわけです。パルメニデスの主張の根拠

は目に見える Aではなく、理屈です。感覚ではなく、理性なのです。パルメニデスは、「思惟^{しゐ}することと存在することは同じだ」といっています。思惟とは

理性で考えることですから、このことばは、理性に合うものだけが存在するという合理主義の見解の表明とみることができます。西洋哲学の歴史は、こうした合理主義をめぐる闘いだ、といってもいいでしょう。実際合理主義の哲学は、以後の歴史のなかで(たとえばプラトン、デカルト、カントのように)連綿とつづいていきますが、そうした哲学への反発もそのつど生じてくるからです。たとえばこのパルメニデスの考えに対しても、すぐに反対者が現れます。ヘラクレイトスは、理性ではなく、感覚を重んじます。自然界には、はつきり目に見える変化がある。つまり移ろいゆくものがあります。感覚を頼りにするかぎり、世の中は常にくまなく動いているということができます。その点を見すえて存在論をつくると、およそ存在するものはすべて変化する(万物は流転^{るてん}する)、とどまるものなど何もない、ということになります。これもある意味では極端です。

* [S48] …「ソフィーの世界」からの引用のページ数

文章Ⅲ

ステイーン・ホーキング『ビッグ・クエスション（人類の難問）に答えよう』49ページから52ページにかけて抜粋した文章を使用。

著作権の関係で掲載しません。

問1 （注 問1は文章Ⅲからの出題です。） A C に入る共通の語句を文章Ⅰの中から探し、抜き出さない。

問2 文章Ⅰの中で「思惟することと存在することは同じだ」とあるが、このような考え方に対して文章Ⅲの筆者はどのように捉えているか200字以内で論じなさい。

い。なお、解答の際は、この文章Ⅰの「思惟することと存在することは同じだ」とはどのようなことか分かりやすく説明し、次に文章Ⅲの中で説明されている宇宙の現れ方とその法則についても触れること。（解答は縦書きで、段落をつける必要はなく、「」や「」は一文として数えるものとする。）